

## 南日本のシカ類の食害を見て北海道での対策を求める

福岡市 佐藤 広行

2020年4月から福岡県に在住となり、2020年は新型コロナウイルス禍の中、感染に気を付けて日本各地を駆け回った。そこで見たものは北方とは異なる南方の植物の圧倒的種類の多様さであるが、同時にシカ類の植物の食害の酷さも目にした。北海道においてもエゾシカの食害が問題視されているが、九州・本州での植生の状況はまさに絶望的であり、北海道とは状況が違った。まだ植生が残る北海道でエゾシカの食害を可及的速やかに防ぐことが、北海道の植物の多様性を保全することに直結し、行政がいかに速やかに対応できるかに掛かっていると思う。本稿では筆者が見た九州・本州の植生状況を踏まえ、北海道での速やかな対応を後押しする資料の1つとなれば幸いである。



図1 ツルラン

九州山地はシカの生息密度が高く、シカの食害により希少な植物や林内の下草が消失するなど森林の生態系に悪影響を及ぼしているため、福岡・熊本・大分・宮崎・鹿児島県の5県でニホンシカの一斉捕獲を行っており、県や市町村、九州森林管理局が連携して、県境を越えて広域的に生息するニホンシカを捕獲し、被害の軽減を図っている (URL: <https://www.pref.miyazaki.lg.jp/shizen/kurashi/shizen/20200813103019.html>; 2020年12月4日版)。縦割りと指摘される行政が連携するほどまでに九州山地ではシカの食害が酷い。

鹿児島県の屋久島ではヤクシカの食害が進んでおりツルラン *Calanthe triplicata* (図1) 等の希少植物が減少している。そのため、試験的に鉄柵で囲い植生を保護しており、鉄柵の中はヤクシカの食害を受けずに植物が繁茂し、小規模な範囲であるが、希少植物が守られていた。しかし、天然記念物・世界遺産に指定された屋久島において、小さな範囲を柵で囲う対策では生物の多様



図2 鳥岳の食害の様子

性を維持できないだろう。

大分県豊後大野市にある烏岳へ調査に行った際には、ニホンシカの食害が進んでおり、下層植生が全く無い状況に恐怖した(図2)。樹木の実生すらない状況で、森林の更新もままならず、現状では禿山になる未来しか見えない。どれだけ希少植物が減っているかとか、ニホンシカの食害の影響がどれだけあるかとかデータを示せと言われても、植物が無いので示しようがない状況だろう。シカ類は急斜面でも歩けるので、斜面にも植物が生育していない。このような植生が無い、または極めて少ない状況が九州各地では広がっていた。

天然記念物として登録されている宮崎県の鉾岳・鬼の目山でも状況は同様で、鬼の目山へ至る登山道の植生はニホンシカの影響で悲惨な状況にあった(図3)。天然記念物として植物の採集等は書類の提出が必要で厳密に保護されているものの、ニホンシカの食害対策が及ばないまま、守るべきものが失われて行っている。

愛知県の茶臼山高原は天竜奥三河国定公園に指定されているが、ここでもニホンシカの食害が酷く、柵で保護されている地点がいくつかあった(図4)。柵内では植生が緑で植物が生育しているのが見て取れるが、柵の外では植物の生育がまばらに見られる程度で、簡易的な柵でもニホンシカの食害に対する有効性が見て取れる。本来はもっと草丈のある植物も繁茂していたのだろうが、草丈のある植物が見られないので、食害を受けた後で柵を設置し、植生回復しつつある状況なのだろう。

高知県や伊豆半島でも食害が進んでおり、

他にも鉄柵の設置でなんとか植生を守っている地域を見てきた。そこで思うのは慣れ親しんだ北海道の植物の将来だ。タケ・ササ類すら枯れ果てた九州・本州地域を見ると、北海道の将来もエゾシカの食害を食い止めないで危ういだろう。それも遠くない将来に。

2018年に北海道の弟子屈町川湯地域の山林で植物調査を行った(図5)。ここではエゾシカの食害と思われる食痕が多数見られた。まだ林床に植物が生育しているが、数年後にはどこまで食害が進むか分からない。現在、関係者の協力を得て調査中である。

九州・本州地域で見聞きしたシカ類の食害を防ぐ柵の設置は、行政が金銭的な負担をして設置したという例は少なく、市民の有志が必死に資金を集め、小規模な柵をやっと設置できる資金が集まった段階で、柵の設置を行政が認め、行政は柵の維持の協力をしているケースがほとんどであった。これでは広大な土地がある北海道では対策が進まない。自然に関心のある市民や林野庁・環境省の行政だけではなく、美しい草花は将来にわたる遺産であるばかりか、観光資源としても利活用している市町村があるのであるから、市町村の観光課や教育委員会等も含めた横断的な官民連携でスムーズに対策をとるべきだろう。

しかし、現状を見れば財政難であるばかりか、人材難でもあり、市町村の環境課やそれに類する自然環境の担当者で、当地の現状がどうなっているか把握している市町村の職員は僅かだろう。見識も深く豊かな学芸員や研究者が活躍できれば良いが、抱える雑務が多く多忙な時間を割いて僅かな時間を作るのが精一杯な現状では、未来に渡っ



図3 鉾岳・鬼の目山登山道の食害様子



図5 弟子屈町川湯の食害の様子



図4 茶臼山高原の食害の様子

て守るべき豊かな生き物が消失する市町村が現れることもあり得るだろう。九州・本州地域のシカ類の植生に対する甚大なる被害を見ると、北海道はまだ豊かな植生が残る地域があるものの、エゾシカの生息域の拡大も進んでいるので、エゾシカの食害を防ぐ対策を速やかに実施し、植物の多様性を保全することに成功して欲しいと願ってやまない。

(一般社団法人 九州オープンユニバーシティ)